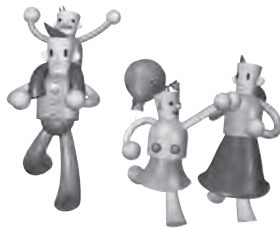




自分が担当する人権問題を詳しく調べる



隣保館だより

編集 下榎隣保館 〒689-4526 日野町下榎157番地1
電話：72-1191 (FAX 兼)
E-mail: rinpokan@town.hino.tottori.jp

榎の実学習会中学生視察研修

大阪にある「リバティおおさか」で人権問題について学ぶ

7月28日、榎の実学習会中学生と教員、下榎支部、隣保館職員が参加し、大阪の「リバティおおさか」（大阪人権博物館）で視察研修を行いました。

生徒たちは、3回の事前学習を行いこの研修に臨みました。はじめに、企画展「親子で学ぼう！部落の歴史と現在」で学芸員による展示解説を聞きまし

た。次に、性と家族・エイズ・沖縄について・障がい者問題・ハンセン病・在日コリアン・アイヌ民族・ホームレス問題などさまざまな人権問題について、各生徒が自分の担当を決め、展示コーナーの説明を見ながら、分からないことはガイドの人に尋ね、ワークシートにまとめました。

施設内の「いのち・輝き」のコーナーでは「命の大切さ」「生まれてくること、いまここにいる不思議」についての展示があり、生徒たちは赤ちゃんの人形を抱っこする体験をしたり、命の始まりや自分が生まれてきたことの神秘さなど、生命の尊さに関心を持ちながら見学をしていました。



学芸員の詳しい説明を聞く



貴重な資料の数々に目を通す。

《リバティおおさか 視察研修》

学芸員さんの話を聞いて

2年 西村彩花

話を聞いて分かったことは・・・部落差別されていたようですが、人の目を気にせず、前に進んでいった人たちの想いと、自分たちの地域の改善をめざした人たちの想いは、とても強いな～と思いました。

「差別されているから」で、あきらめず、何か目標を持って前に進んでいくのはスゴイことだと思いました。当時の人たちの想いが強く伝わってきました。差別の始まりも詳しく聞けたので良かったです。

自分たちも今の学習で、差別に負けないように、目標を持って頑張っていきたいです。当時の人たちの頑張りを受け継いでいきたいです。

地域交流清掃活動と親子料理教室

7月16日



親子で汗を流す

《地域交流清掃活動》

老人会と子ども育成会が合同で老人憩の家と集会所周辺の草とりをしました。

朝から暑い日でしたが、35名の参加者があり、1時間の作業でとてもきれいになりました。

《親子料理教室》

清掃活動の後、集会所で町食生活改善推進協議会の皆さんの指導により、旬の食材を使った親子で出来る料理を4品作りしました。

盛り付けなどは子どもたちの出番。和やかな雰囲気の中、親子一緒においしい料理が出来ました。家でもたのしくお手伝いができればいいな♪と感じました。

メニュー：デコレーションずし、ゆらゆらわかめのすまし汁、夏野菜の元気サラダ、ミルクゼリー

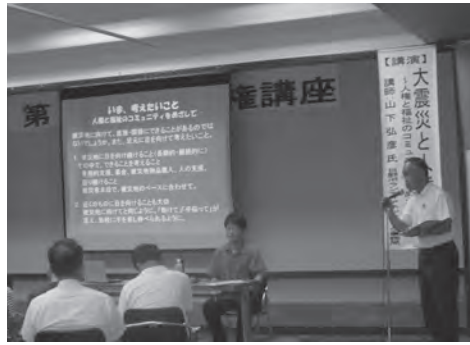


男の子も上手です

9月の学習講座予定

- ★セラバンド体操
9月14日(水)午前10時～
- ★生け花(草月流)
講師…高橋伸也さん
- ★9月24日(土)午後1時30分～
講師…生田清子さん
- ★クレイフラワー
講師…妹尾仁津美さん
- ★日程調整中

第2回町民人権講座から



被災地の現状報告に息をのむ

町民人権講座を振り返って

『大震災と人権』と人権と福祉のコミュニティをめざしてと題して6月29日開催した講座は、山村開発センター大集会室が満席となる112人の参加者を得て、これからのコミュニティについて考えるきっかけとなった。

3月11日の東日本大震災。地球エネルギーの大放出はかつて経験したことがない甚大な被害と、人間は自然の前では微力な存在であることを再び痛感させられ、加えて津波による原発の世界的大惨事は安全・クリーンエネルギーの提唱を根底から覆した。

住家資産を、家族を、まちや村を根こそぎ失い、築いてきた人生や幸福感、価値観、将来への展望、とりわけ自身の存在意義と人としての尊厳の喪失感被災者のみならず人々

を絶望の淵に沈めた。呆然と座り込む人、ただおろおろと捜し求めるだけの人、生きる気力をなくした人々。支援活動に悩むボランティア、支援の方法に戸惑う人々、復興の困難性に苦悩する自治体。『命、生きる』と言う人権の基本的な視点として、『人間とは、社会とは』と考えられずにはいられない。

宮城県災害ボランティアセンターでも活動を続ける講師の山下弘彦さん（日野ボランティアセンター）は、被災地住民にとって災害への恐怖感、過酷な環境、健康の維持、要援護者の増加、将来生活への不安・喪失感、つなごりの喪失等、その他数多くの現状課題があると報告。更に地域社会の崩壊によって生活再建が一人ひとり様でなく転職、廃業、定住、転出などそれぞれニーズが異なること、また地域によって地震被害、浸水被害、津波被害、放射能被害と抱える課題の違いから、その支援の困難性など今後の重大さを報告。まさにマイナスからの地域社会づくりへの挑戦であり、被災者へ寄り添い被災者の視点で考え気付き、ことが重要で、多様なニーズに即した長期の支援が必要であるとされた。

山下さんは、大震災を契機に『いま、考えたいこと』として、被災地に目を向け続け、語り続け、直接・間接にできることをなすこと。また、私たちの住む地域社会に置き換えれば、社会は繋がっている自覚を持ち、それぞれの暮らしを見つめ課題を共有し、話し合いのできる土壌の醸成と自主的・主体的取り組みが求められているとし、「助けて」「手伝って」と気軽に言え、手を差し伸べられるコミュニティづくりがこれから益々

大切と結んだ。

とりわけ今回の原発事故には思いを馳せざるを得ない。戦後の大混乱を奇跡的な経済成長で乗り切り、より便利に、より豊かに、より快適に、より裕福に生活が一変するとともに価値観が変わった。産業は発展し、その構造も大きく変貌を遂げ、それに伴い暮らし場所も集中して、かつて生命産業地であった農山村は疲弊の一途をたどっている。

私たちが暮らし始めた25万年前とも言われるそのときから、鳥たちはその姿、暮らし方を変えず自由に大空を舞っている。それが良いと、言うつもりはもうとうない。社会や経済の変容によっていつでも自由に住む場所や暮らし方の変えることができる私たち人類は、利便性や経済性、豊かさの一方的な基準にとらわれて大切なものをなくしてはならないと思う。必要なことは何を大切にしなければならぬかということ。私たちの共通の未来の子孫に引き渡すべきは何なのかということではないかと思う。

たかだか数十年前に自分たちの手で作り出したものに、営々と築いてきた私たちの心のよりどころ、脈々と受け継いできた命と英知を一瞬に奪われる悲劇は二度と繰り返してはならないと思う。

第3回町民人権講座から

7月10日からの1ヶ月間は『部落解放月間』として、全国でさまざまな取組が行われた。「もう部落差別は無くなった」と言う意見もある今日、実態はどうなのかインターネットの世界で検証しようと、日野町で

も7月25日、講演会を開いた。

もはやインターネットは、パソコンや携帯電話によって誰でも簡単に情報の受信ができる優れた通信手段だ。今では多くの人が利用し、独自のホームページ、ブログなどを作成するのも当たり前の時代になり、生活に欠かせないものとなった。一方、インターネットは一定の匿名性も保障され自由な発言はもろろん、特定の団体や個人を誹謗中傷する意図的な情報を流しても自身の安全は凶られ、その情報は瞬時に世界中へ広がる側面がある。

現代の部落差別はこのインターネットの世界で一層深刻化している。インターネット大手検索会社グーグル社のグーグルマップを利用し、その地図上に鳥取県をはじめ他府県の被差別部落を掲載したホームページがそれであると、80名の参加者を前に講師の清見久夫さん（大山町）は警鐘を鳴らした。

加えて、清見さんはA市の市民意識調査結果から「結婚に際し同和地区かどうか調べる25%」、またB市の宅地建物取引業者社人権問題実態調査結果から「取引物件が同和地区か質問を受けた38%」「その結果、取引が不調になった20%」（不調となった理由）同和地区だから20%、小学校区内だから28%、両方だから26%」を例に挙げ、部落差別が今なお社会に現存し、その差別は土地（出身地、地名）に対する差別であると指摘した。

被差別部落の成立、差別の歴史、そこに暮らししてきた人々の生き方などを正しく知らず部落問題をやゆする言い方（表現）は更に偏見を生み出し、身元調査に利用され部落差別を助長することになる。同和問題を

正しく理解する人権教育、啓発が重要で不確かな情報や「知らない」と言うことが差別意識を温存助長してきたと、見解を述べた。

最後に、インターネットでは在住外国人や障がいのある人などの社会的に弱い立場の人に対しても差別用語で罵倒するといった人権侵害が広がっているとし、一方、ホームページで被差別地区を掲載した作成者およびグーグル社への削除要請を行ったほか、国・法務局・自治体などへの支援要請、また行政のモニタリングと市民からの通報窓口の設置、インターネットでの行政情報公開の一定の配慮、教育・啓発の推進などの必要性を強調するとともに、法的整備の遅れを指摘し、一日も早い差別禁止と人権侵害被害を救済する法律・制度の整備が必要とした。

どうやらこれまで、ともすれば言われてきた「部落差別はもう無い。そつとしておけば・・・」ではなさそうである。私たちも『地域（土地）差別』についてもう一度心の中を整理する必要があるようだ。



インターネットの危険な姿を説明